論説

到津家蔵「豊前国宇佐宮絵図」の成立

眞野和夫

一　はじめに
二　近世宇佐宮境内絵図の編年
　(一)　絵図構成要素の検討
　(二)　絵図編年の目安
三　「到津家絵図」の成立
　(一)　「到津家絵図」の史料的価値
　(二)　「到津家絵図」の編年
　(三)　「到津家絵図」の成立
四　おわりに

一　はじめに

周知のように宇佐宮弥勒寺は、承和五年(八三八)の堂塔五宇焼失を嚆矢として、回禄と復興を繰り返している。そして、中核伽藍である講堂・金堂に至っては、幕末の嘉永年間に颱風によって顚倒するまで存続しているのである。この時の講堂・金

堂は、弥勒寺盛時のものに比較するとやや規模を縮小した建物であったとみられる。しかし、現状基壇に遺る礎石の配置や発掘の所見から、直接的に最終段階の建物の形態や規模を窺い知ることはできない。さらに文献史料においても近世の弥勒寺伽藍に関する記事は、ほとんど皆無といってよい状況にある。

このような中にあっていくつかの宇佐宮境内絵図は、しだいにさびれゆく弥勒寺の様子をよく伝えている。ある意味では、まさに今日の記録写真に相当するものと言えよう。ただしこれらの絵図を史料として活用しようとするとき、絵図のもつ限界性に留意するのはもちろんであるが、時として成立年代の明らかでないものについて相互の順序関係を究明し、編年を行なう必要性が生じる。実はこの近世宇佐宮境内絵図編年の作業は、絵図をもととして弥勒寺伽藍の変遷を辿ろうとして生じた副次的産物である。そもそもの発端は、近世における宇佐宮境内絵図のうち、精密さととりわけ豊かな情報量とを誇る到津家蔵「豊前国宇佐宮絵図」（以下「到津家絵図」と略す）に成立年代の記載がないことにあった。「到津家絵図」は、弥勒寺は言うまでもなく近世の宇佐宮とその周辺の状況を知ろうとするとき、欠くことのできない重要な資料である。

したがって、この小論の目的は、「到津家絵図」の成立年代を推定することにある。

二　近世宇佐宮境内絵図の編年

㈠　絵図構成要素の検討

近世に成立した宇佐宮境内絵図のうち、管見するものとして第一表に掲げるE～Mの九図がある。このうちJ～Mが年代不明の絵図である。

絵図はその制作目的によっては様々に潤色が加えられている。表現上誇張や省略された部分もあろうし、実際を熟知して描く場合もそうでない場合もあろう。またさらには、以前に成立した絵図を参考としながら描くこともある。細川氏の復興状況を描いた「寛永五年絵図」はその好例で、「応永古図」を手本としながら、随所に細川氏再建の業績をより豪華に、より壮大に

第一表 宇佐宮古図

	名称	成立時期	所蔵者	内容
A	上宮頓宮指図	文治年間（一一八五～九〇）	宇佐神宮	文治年間の造替における造営担当割当を記す。写しが伝存する。
B	宇佐宮古図	室町時代	宇佐神宮	大内氏による応永年間の造営後の復興状況を描くと伝えられる古図。通称応永古図。
C	宇佐宮指図	室町時代	宇佐神宮	宇佐宮全体の指図。応永古図の内容と酷似することから、応永造営時のものとされる。
D	上宮指図	天文四年（一五三五）	宇佐神宮	天文四年の裏書をもつ。Cの指図とは細部で若干異なるところがある。
E	寛永五年絵図	寛永五年（一六二八）	永青文庫	細川氏の慶長～寛永年間の造営を中心とした復興状況を描く。
F	島原藩絵図（一）	享保八年（一七二三）以後	島原市	享保八年の上宮火災後に提出された、焼失状況を報告する絵図。
G	島原藩絵図（二）	寛保二年（一七四二）以後	島原市	享保八年の上宮火災の復興後、即ち寛保二年以後に作成された絵図。
H	天明四年社頭図	天明四年（一七八四）	内閣文庫	天明四年に発行された一般向け社頭絵図。
I	安政四年再鐫社頭図	安政四年（一八五七）	宇佐神宮	安政四年に再発行された一般向け社頭絵図。
J	豊前国宇佐宮絵図	不詳	到津公斉	宇佐宮境内および周辺を含めた詳細絵図。弥勒寺は大部分指図で表示。柱間寸法を記入する。
K	豊前国宇佐宮図	不詳	陽明文庫	到津中務大輔献上の絵図。上宮西大門の形から成立は寛保二年以後。
L	彰考館の絵図	不詳	水府明徳会	御祓所頓宮の存在、上宮の経蔵の位置に宝蔵があることから成立は幕末。弥勒寺建物は正面三間。
M	宇佐宮絵図	不詳	宇佐神宮	同右
N	官幣大社宇佐宮図	明治三七年刊（一九〇四）		『大分県社寺名勝図録』所収、銅版画社頭図。
O	宇佐宮境内図	大正期ごろ	宇佐神宮	弥勒寺旧境内を住宅・旅館・食堂・店舗などが占める。宇佐駅からの軽便鉄道が敷設されている。縮尺二千分の一。
P	宇佐神宮境内平面図	昭和五八年	宇佐神宮	航空測量による詳細平面図。縮尺五百分の一。

伝えようとする意図が窺われる。絵図編年の作業は、絵図のもつこのような特性を十分考慮しつつ進めなければならない。

絵図にかかわらずすべての編年の基本は、まず普遍と変化の分離から始まる。変化部分の抽出に成功したならば、その変化部分が体系のなかでどのような位置にあるのかを見極めねばならない。この場合、年代のよりどころとなる確実な資料によって、その変化が辿れるならば申し分ない。宇佐宮境内絵図には、上宮・下宮・弥勒寺をはじめとする多数の社殿・堂舎あるいは山や川・樹木等が描かれている。例えば、最も詳細を極めた「応永古図」では、境内建物の総数一四四棟にも及んでいる。そこで編年作業の基礎となる絵図の構成要素の検討に当っては、まず大きなブロックとして上宮ほか六ブロックを、他に六か所の社殿や関連の施設を取り上げることとする。また、編年の基準となる絵図として主に次の六絵図を使用する。

a　宇佐宮指図（応永造営時のものと考えられる指図。「応永指図」と仮称する）

b　寛永五年絵図

c　島原藩絵図(二)（寛保二年の上宮復興後のもの）

d　天明四年社頭図（「天明社頭図」と仮称する）

e　安政四年再鐫社頭図（「安政社頭図」と仮称する）

f　官幣大社宇佐宮図（明治三七年刊『大分県社寺名勝図録』所載）

以下、ブロック毎に検討を加える。

(1)上宮

上宮に関しては、aのほか、古く文治年間（一一八五～一一九〇）の上宮頓宮造替時のものと伝えられる指図（写し）をはじめ、天文四年（一五三五）の裏書きをもつ指図などが伝存し、改変の少ない中世以前の姿を把握できることは貴重である。

伝統を重んじかつ保守的傾向の強い神社の数多い社殿のなかでも、その中核となる本殿等の建物はとくに変化の少ない部分である。上宮の建築群は、廻廊と玉垣とによって囲まれた部分の内と外に分けて考えるのがよい。まず、三殿の所在する内部

第2表　上宮の変遷

	下参道南大門	花棚	衛士屋	御輿宿	護摩堂	南大楼門	門距離 西中門・大	経蔵	幣殿	態の垣屋の形 西大門両翼	西大門	国司屋
文治指図			北大門脇 西中門脇	○	×	○	七尺八寸 五丈 玉垣～垣屋	○（垣屋内）	○（垣屋内）	直線	四脚門	○
応永指図		○	西中門脇	○	○三間 ×三間	○		○同	○同	直線	四脚門	○
天文指図		○	東中門脇 西中門脇	○	○三間 ×二間	○	六丈五尺	○同	○同	で張り出すを取り込んで幣殿・経蔵	四脚門	○
寛永絵図		?	?	○	○	○※		※	○（垣屋外）	直線	※三間二重門一戸	○※
島原絵図(一)	石段	○	西脇 南中楼門	○	○	×		×	○（垣屋内）	で張り出すを取り込んで幣殿・経蔵	四脚門	×
島原絵図(二)	○	○	同・懸造	○	○	×		×	○同	同	向唐門	×
天明社頭図	○	×※	同（宿直所）	○ ○ ※ 位置 入れか え		×		×	○同	直線	向唐門	×
安政社頭図	○	○	西大門脇（番所） 同・懸造	○ ○ 戻る 位置		×		×（宝庫）	○（垣屋外）	直線	向唐門	×

（※は絵図の虚構・捨省部分）

は、八幡造りの三殿（現在のものは安政六年～文久元年の造営・国宝）および申殿（講演堂）・北辰社・春日社・住吉社・御湯殿などから成り、その規模はもちろん建物配置に至るまでほとんど変化を見出すことはできない。

これに対し廻廊と玉垣の外側部分については、近世初頭段階で国司屋・南大楼門などの建物がなくなるほか、建物配置等にかなりの変化が現われる。中世における建物の基本的構成は、国司屋・御輿宿・護摩堂・幣殿・経蔵・花棚・衛士屋などで、これらが四方に大門を具えた垣屋によって囲繞される。

各絵図毎の建物の存否および配置等については第二表に示すとおりである。このうち、とくに注意すべき点を次に記す。

(イ) 西大門の建築様式については、「寛永五年絵図」は例外としてそれ以前は四脚門、「島原藩絵図」(二)以後は向唐門に描かれる。この向唐門は、元文五年（一七四〇）に造営された現在の西大門である。この門の形態は非常に特徴的であり、絵図においても明瞭に判別される。

「寛永五年絵図」に描かれた西大門は、三間一戸二重門という様式の壮大な門で、細川氏の造営記録(2)のなかにもないことから同絵図の明らかな虚構部分である。細川氏造営段階には西大門は建っていなかった可能性もあるが、上宮表門としての意義からしてやはり四脚門程度の門はあったとみるべきであり、その場合、門の位置は当然「天文指図」どおり西中門との距離六丈五尺のはずである。

(ロ) 天文四年指図において、それまで直線的であった西大門から南へ延びる垣屋が、幣殿・経蔵を取り込んで西側に屈曲して張り出す。このことは、恐らく西中門～西大門間の面積拡大志向と関係することである。

「文治指図」では、東西の中門・大門は一直線に並び、西大門の両翼には垣屋が屈曲することなく直線的に延びている。指図中の寸法からも、この時の東西大門を具えた垣屋の形が長方形を成していたことは疑いない。また、西中門～西大門間の距離は、「西玉垣ヨリ垣屋中間　五丈七尺八寸」という記載より、二つの門の脚の奥行分を差引いた大体四丈八尺（一四・四メートル）前後ということになる。当指図は本来上宮の頓宮用のものであるが、古い段階には本宮・頓宮同規模に造営するなら

わしであるので、比較のためここに用いた。次に「天文の指図」には、この距離が六丈五尺（一九・五メートル）とあるので、この時にはじめて拡大されたことがわかる。そしてさらに(イ)で述べたように、現在の西大門が当初のままの位置ならば、元文五年の段階で二つの門の距離は再び約二七メートルに拡大されたことになる（第六図）。

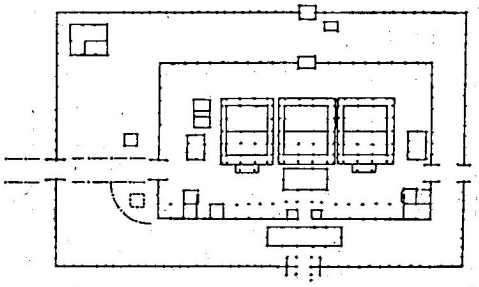
西大門の西側への移動は、山頂という地形上の制約から容易ではなく、東西のすべての門を一直線上に配置するという伝統的な上宮の建物配置の変更を余儀無くした。現在の西大門が、東西中門を結ぶ線の延長から測って約一〇メートルも北側に位置しているのはそのためである。つまり、頂部を新たに造成したり、あるいは参道をつけ替えたりせずに門を移して西中門～西大門間の距離を拡げるには、門を若宮から西大門へ向う参道上を移動させていくことが最も簡単な方法であった。このため門自体も参道に直面するよう若干斜め向きとなった。

これらの変更によって、西中門～西大門間の距離は延び、西中門前面の面積は拡大したが、地形の制約から南側垣屋は従来の延長線上に建設することができず、西中門・玉垣と西大門・垣屋とによって囲まれた範囲はいびつな四辺形となるに至った。しかし、このようになっても絵図ではあくまで西大門を東西中門を結ぶ延長線上にあるように描いている。

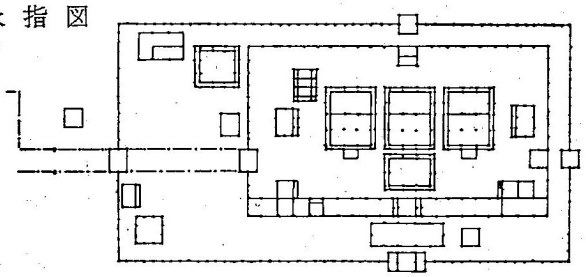
なお、「天文指図」にみられる垣屋が幣殿・経蔵を取り込んで西に張り出す設計は、基本的には「島原藩絵図」(一)・(二)に踏襲されているが、両者の間に成立した「寛永五年絵図」では、垣屋は直線で、しかも幣殿を外に置いて取り込んでいない。この時の幣殿は新規造立ではなく修理分であることにも注意したい。

(ハ) 衛士屋も割合変化の多い構成要素の一つである。「天文指図」以前には西中門脇にあったが、「島原藩絵図」(一)以後は南中楼門西側に移る。しかも「島原藩絵図」(二)では懸造りとなっている。「天明社頭図」では、同じ場所ではあるが懸造りではなくなり、宿直所と記されている。幕末の「安政社頭図」では、四方に門を具えた垣が再び全体に巡らされ、西大門脇に「番所」が、また南大門脇の垣外に懸造りの「ヱシヤ」が描かれている。なお、明治三七年刊行の「官幣大社宇佐宮図」には、西南隅付近に番舎として描かれ、その東隣りに宝庫がある。宝庫の場所はかつて経蔵のあった位置で、「安政社頭図」にはじめ

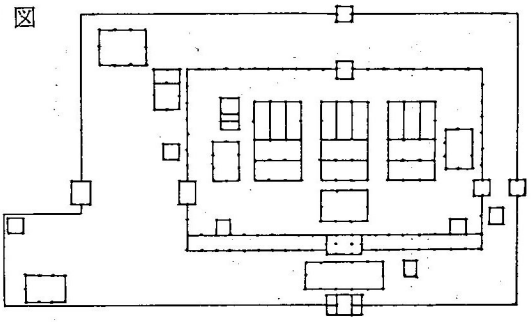
1. 文治指図
(上宮頓宮)



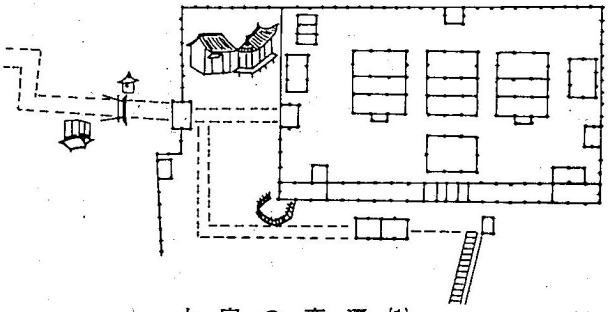
2. 応永指図



3. 天文指図

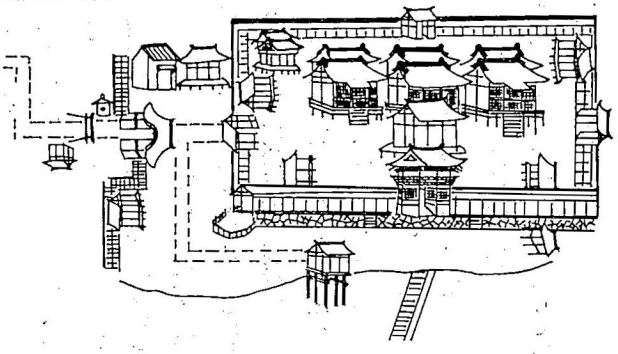


4. 島原藩絵図(1)

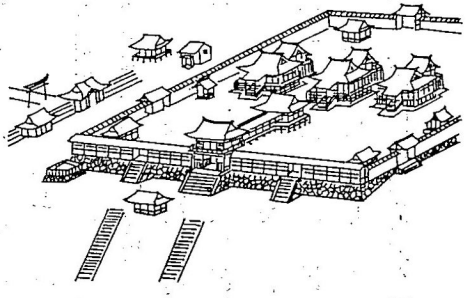


第1図　　上宮の変遷 (1)

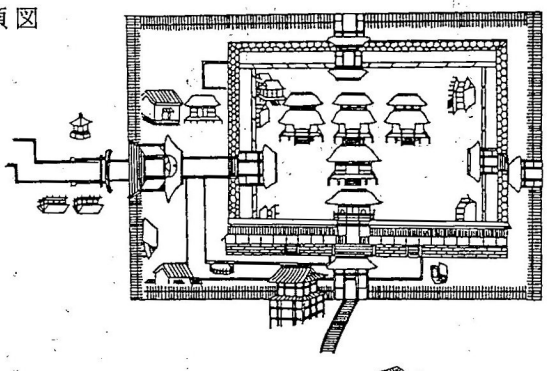
5．島原藩絵図(2)



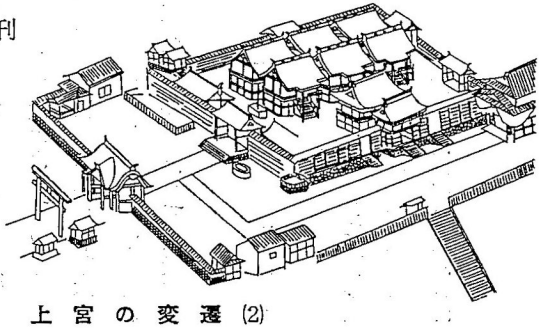
6．天明社頭図



7．安政社頭図



8．明治37年刊
社頭図



第2図　　上宮の変遷(2)

てみえる。

(ニ) 南大楼門下の参道は、「島原藩絵図」(一)以後は石段として描かれているが、「応永古図」や「寛永五年絵図」にはまったく描かれていない。

(2) 下宮

下宮の建物の種類や配置は、近世においてあまり大きく変化していない。中世の下宮は、中心となる三殿のほか講演堂・廻廊・御炊殿・御供所・厨屋・北辰殿・門・衛士屋、それに御鵜羽屋・御湯殿・御輿屋・御幣殿・経蔵といった五棟の建物群(西方建物群と仮称する)が付属している。また、東方やや離れた位置に高倉がある。下宮の変化の特色は次のようである。

(イ) 中世段階では、三殿・講演堂・廻廊と並列して建ち、三殿が築地等によって直接囲繞されることはなく、近世も基本的にはこれを踏襲している。しかし、幕末以後いくつか変化が現れる。「安政社頭図」には廻廊と御殿がそれぞれ廊下で結ばれる。また、明治三七年刊行の「官幣大社宇佐宮図」では、廻廊とみられる建物から派生した築地(塀屋か)によって三殿が囲繞され、上宮と類似した構造をとる。この築地の北側には門が設置される。

(ロ) 御炊殿についても、「安政社頭図」では、三殿東側の伝統的な位置から姿を消し、替って御供所が廻廊の東南側に建っている。また、関連の御供所・厨屋については、すでに「島原藩絵図」(二)の段階で姿を消している。

(ハ) 下宮の衛士屋は、「応永古図」には門の内側近くにみえるが、その後姿を消す。「天明社頭図」に位置を変えて再び登場するようであるが、建物の名称は明確ではない。しかし、「安政社頭図」には、かつて御炊殿があった場所に門が置かれ、それとともに衛士屋も復活している。下宮の門は明治三七年刊行の絵図ではまったく位置を変え、現在の方向と同じ北向きに開扉する門となる。

(3) 頓宮

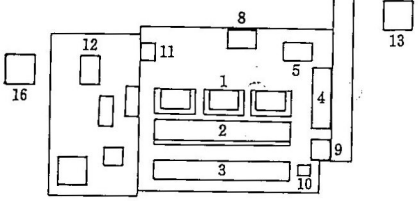
上宮・下宮・若宮の頓宮については式年造替が途絶えて以後のことであるから、頓宮の敷地としていかに記憶されていたか

第3表　下宮の変遷

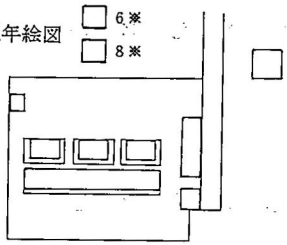
	三殿	講演堂	廻廊	御炊殿	御供所	厨屋	門	衛士屋	北辰殿	西方建物群	高倉	その他
応永指図	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○（五棟）	○	
寛永絵図	○	○	×	○	（土器屋）外※	○	○	×	○	×	○	
島原絵図（一）	○	○	×	○	×	×	○	×	○	×	○	
天明社頭図	○	○	×	○	×	×	○	？外	○	×	○	
安政社頭図	○	×	○	×	○	×	（位置変更）	○内	○	×	○（宝形造）	
明治社頭図	○	×	○	（位置変更）御竈舎	×	×	（位置変更）	×	×	×	○	御馬舎
昭和測量図	○	×	○	×	×	×	（位置変更）	×	×	×	○	授与所

（※は絵図の虚構・捨省部分）

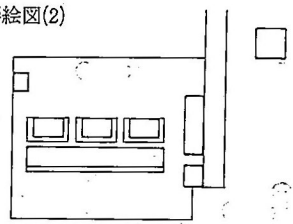
1．応永指図



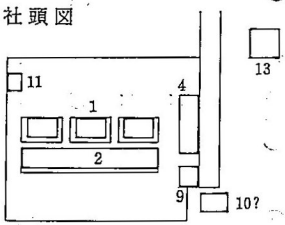
2．寛永五年絵図



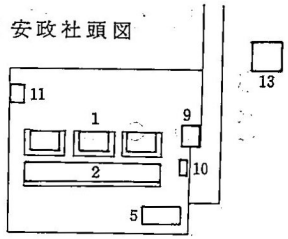
3．島原藩絵図(2)



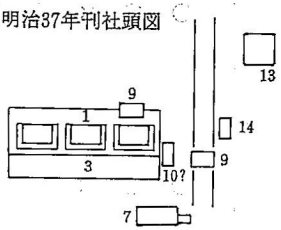
4．天明社頭図



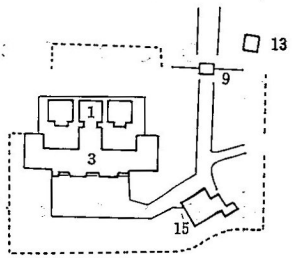
5．安政社頭図



6．明治37年刊社頭図



7．昭和58年境内平面図



1．三　殿　　9．門
2．講演堂　　10．衛士屋
3．廻　廊　　11．北辰殿
4．御炊殿　　12．西方建物群
5．御供所　　13．高　倉
6．土器屋　　14．御馬舎
7．御竈舎　　15．授与所
8．厨　屋　　16．聞持堂
（※は虚構部分）

第3図　　下宮の変遷概略図

ということになる。第四表に示す。

(4) 菱形池周辺地区

小椋山の北側には菱形池と呼ばれる池がある。池の周辺や小島に、塔やいくつかの堂舎をはじめとする関連施設が造立されている（第四表）。「応永指図」所載の建物は、大弐堂・文殊堂・御馬所・五重塔・大塔・馬場庁・祈皇寺などであるが、近世になると大弐堂・文殊堂を除いてほぼ姿を消し、替って天神や弁才天・聖徳太子を祀る小社が現われる。多様化した近世庶民信仰への対応であろうか。祈皇寺は、天養年中（一一四四～一一四五）に鳥羽院后高陽院の御願によって建立されたと伝えられ「応永古図」には描かれているが、「島原藩絵図」(二)にはすでに記載がない。また「天明社頭図」には「祈皇寺古やしき」とあって、宮迫の東に祈皇寺が移ったことが知られる。近世における変化の少い地区である。

(5) 弥勒寺

近世初頭の弥勒寺関係の堂舎はごく少ない。細川氏の造営記録によると、新規建立分が祇園社・鳥居・西大門・祝堂・呉橋の五か所、修理分が仮講堂・仮金堂・鐘楼の三か所である。「寛永五年絵図」の壮麗な伽藍の賑いぶりとはまったく対照的なさびれゆく弥勒寺の現実がそこにはある。ただ、ほとんどの堂舎が「応永古図」より壮大に描いてある中に、常行堂・長僧坊・食堂については、建物規模を縮小したのみならず建物そのものや配置にオリジナリティが認められる。また、後続する絵図に記されたそれらの建物の跡もほぼ一致する。それらの建物が寺院活動を維持するため最低限必要な建物と考えられることからも、実際に建っていた可能性は大きい。また、経蔵（輪蔵）についても「島原藩絵図」(二)やその他の絵図にも記されていることから近世段階では遺存していたと考えられる。

近世における弥勒寺の変遷を第五表に示す。このうちとくに注意すべきは講堂・金堂の建物である。細川氏の造営記録では修理分として「仮講堂・仮金堂」とあるのみで、規模についての記載はない。一方「寛永五年絵図」をみるとそれらの伽藍は「応永古図」並みの壮大な建物、桁行九間の講堂と桁行七間の金堂が描かれている。なぜ「仮」がつくのか理解に苦しむわけ

第4表　菱形池周辺地区ならびに頓宮の変遷

	応永指図	寛永絵図	島原絵図(一)	天明社頭図	安政社頭図	明治社頭図	昭和測量図
若宮頓宮	建物配置若宮と同じ	同	若宮頓宮跡	同	同		
下宮頓宮	建物配置下宮と同じ	同	下宮頓宮跡	同	同		
上宮頓宮	建物配置上宮と同じ	同	上宮頓宮跡	同	同		
水分神社	×	×	×	×	竜王	○	○
太子堂	×	×	○	○	○	本匠祖神社	○
弁才天	×	×	○	×※	○	稲荷社	×
天神	×	×	○	○	○	天満神社	×
御田所	×	○	○	×※	○	○	○
祈皇寺	○	○?	×	古やしき	×	×	×
馬場庁	○	○※	跡	×	×	×	×
大塔	○※	○※	跡	×	跡	×	×
五重塔	○※	○※	跡	×	×	×	×
御馬所	○	○※	○	御くら	神馬舎・蔵所	×	×
文殊堂	○	○	○	○	○	護王神社	×
大弐堂	○	○	○	○	○	画馬舎	絵馬堂

(競馬場)

頓宮御輿倉

(※は絵図の虚構・捨省部分)

表5表　　弥勒寺の変遷

	講堂	金堂	鐘楼	伽藍	祇園社	経蔵	阿伽井	南門	東三重塔	西三重塔	四王堂	西大門	東大門	堂行堂	長僧坊	食堂	東宝塔	西宝塔	北門	その他
応永指図	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	
寛永絵図	仮講堂	仮金堂	○	○	○	○	×	○※	○※	○※	○※	○	○※	○	○	○	○※	○※	○※	
島原絵図(二)	○	○	○	○	○	○	○	跡	跡	跡	跡	仁王門	跡	跡	×縮小規模	跡	跡	跡	×	
天明社頭図	○	○	○	○	○	○	○	跡	跡	跡	跡	○	×	跡	跡	跡	跡	跡	跡	ごま堂跡
安政社頭図	○	○(宝形造)	○	(岩井堂)	○	○	×	門ノ跡	×	×	(土ブタイ)	大門	×	(行堂跡)	×	(直堂跡)	(塔跡)	×	放生池(北門跡)	
明治社頭図		祖霊社			○			(旅店)			館舗)	○			(旅店)		館舗)			
昭和測量図	基壇跡	基壇跡			○															

(※は絵図の虚構・捨省部分)

である。しかし、後続する「島原藩絵図」(二)あるいは「天明社頭絵図」などによってこの疑問はすぐに解ける。なぜならこそれらの絵図に描かれた弥勒寺の講堂・金堂は、いずれも規模縮小した建物になっているからである。すなわち、「島原藩絵図」(二)では、講堂・金堂とも桁行五間の建物、「天明社頭図」では講堂が桁行五間梁間四間、金堂が桁行・梁間とも各三間の宝形造り建物となっている。そしてさらに「安政社頭図」の金堂は桁行五間の宝形造りに描かれている。絵図相互の建築の相違についての検討ももちろん必要となるが、この規模縮小した建物こそ細川氏修理分の「仮講堂・仮金堂」に他ならない。

この他、「島原藩絵図」(二)の段階ですでに常行堂・長僧坊・食堂などの建物が姿を消して、「〇〇跡」と記されていることは一八世紀半ごろの弥勒寺の宗教活動を考える上できわめて重要である。

「安政社頭図」に描かれた弥勒寺関係の堂舎は、ミロクジ(講堂、正面五間)・金堂(正面五間、宝形造り)・経蔵・鐘楼・大門(西大門)・ギオン・岩井堂(祝堂、位置間違い)などで、かつての東大門脇に放生池らしきものがはじめて描かれている。弥勒寺は、講堂・金堂を嘉永年間の颱風で失い、さらに明治初年の神仏分離によってその永い歴史を閉じる。明治三七年刊行の絵図には、旧境内に旅館や店舗・住宅が建ち並ぶ情景が描かれている。そしてこの状態は昭和の大造営まで続くのである。

(6) 弥勒寺北方地区

弥勒寺北方地区とここで呼んでいるのは、弥勒寺の北門以北、寄藻川と現表参道とに挟まれた地域である。この地区には「応永指図」や「寛永五年絵図」によれば、寺家等・護摩堂・北大門・女祢宜社・黒男社・大鳥居・初沢池などがあることになっている。このうち、近世初頭の段階で存在するのは確実なところ、「寛永五年絵図」に描かれた七軒の寺家等と黒男社・大鳥居・初沢池というところであろう。「天明社頭図」にもある寺家(寺所)が「島原藩絵図」(二)で描かれていないのは、上宮復興後の姿に力点を置いた同図の制作目的からくる捨省部分とみられる。このことは、寛保元年(一七四一)に喜多院ならびに堂仕村の塀を新規造営していることからも明確である。「安政社頭図」にもりっぱな塀に囲まれた家並が描かれ社家とある。

第6表　弥勒寺北方地区ならびにその他の変遷

	応永指図	寛永絵図	島原絵図(一)	天明社頭図	安政社頭図	明治社頭図	昭和測量図
大宮司邸	×	×	×	×	○	○	○
楠観音	×	×	○	×※	神木		
内ノ大弐堂	○	○※	×	×	×		
舞台	○(応永古図)	○	○	○	○	○	×
祓所	×	×	御祓所の仮殿	御祓所	頓宮	御輿庫	(位置変更)菱形池内(位置変更)表参道南端
東宮	三殿 弥勒寺東大門脇	二殿 同	東宮跡	×	(位置変更)表参道南端	頓宮 ○	(位置変更)祇園社東側
初沢池	○(応永古図)	○	○	×	○	○	○
大鳥居	○	○	×	○	○	○	○
黒男社	○	○	○	×※	○	○	○
女祢宜社	○	○※	×	×	×	(位置変更)○	
北大門	○	○※	×	×	×		
護摩堂	弥勒寺内	○※	×	×	跡		
寺家	○(応永古図)	七棟	×※	○	社家		

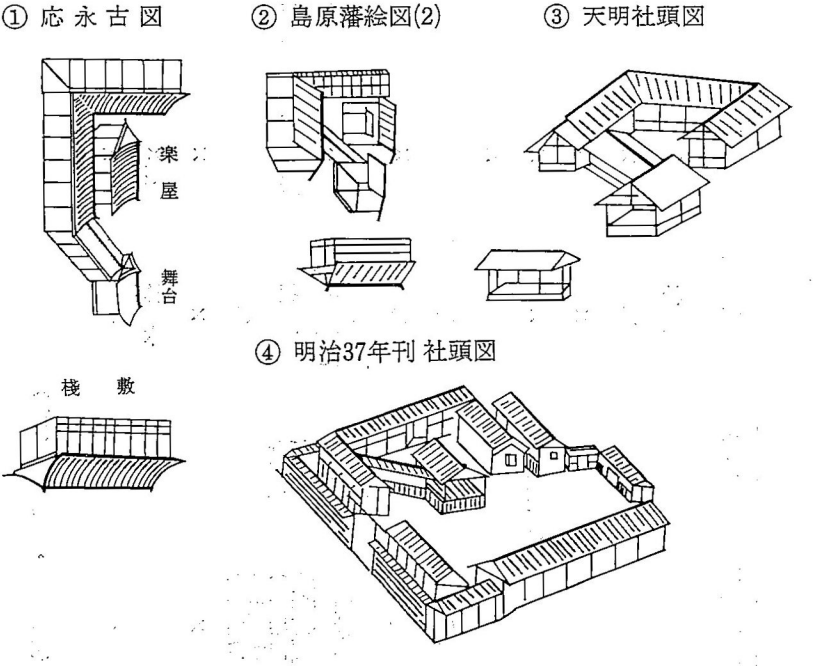
(※は絵図の虚構・捨省部分)

明治三七年刊行の絵図によれば、黒男社のやや南に位置して女祢宜神社とあり、詳細は不明ながら復活したようにもとれる。

(7) その他

これまで宇佐宮を構成する比較的まとまりのある部分について、ブロック毎に単位としてその変化をみてきた。つぎに、単体の建物や施設についてみよう。

① 東宮　「応永古図」をみると、弥勒寺東門脇に一間社らしき三棟の建物が並列して描かれているのが東宮である。ところが「寛永五年絵図」では二棟に、「島原藩絵図」(二)には「東宮跡」とあり、「天明社頭図」にはすでに記載がない。そして「安政社頭図」には、表参道の南端近くに再び「東宮」として現われ、明治三七年刊行の絵図にも同一位置に「春宮神社」とある。その他幕末に成立したとみられるいくつかの絵図にもほぼ同じ位置付近に「春日社」あるいは「春日」として記載されている。現在春宮神社は、応永期と明治期の位置のちょうど中間付近に再び移っている。東宮は「はるみや」と読むことから春宮となった過程は理解できるとして、春日



第4図　舞台の変遷

と記されたものは春宮からの誤認ないしは誤記とみるべきであろう。

② 祓所　現在の表参道の北端、寄藻川近くに初めて祓所が建つのは、「島原藩絵図」㈡である。これには、御祓場仮殿ならびに小屋と記されている。その後、「天明社頭図」には御祓所、「安政社頭図」では頓宮・常小屋、明治三七年刊行の絵図には、頓宮・詰所・御輿屋が記されている。したがって、この祓所は比較的早い段階で頓宮となったことがわかる。ちなみに、現在の祓所は表参道の南つき当たりに位置する。

③ 舞台　菱形池の西南側、現在の表参道に面する位置に能舞台が設けられている。「応永古図」によれば、渡り廊下のついた舞台・楽屋・機敷などによって構成され、これに土蔵が付属する絵図もある。また「寛永五年絵図」では、機敷付近にもう一棟小さな建物がみえる。これは「島原藩絵図」㈡にもみえ腰カケとあるので、一般の参拝者の休憩所らしい。「天明社頭図」では、機敷の記載はなく腰かけのみとなる。

明治三七年刊行の絵図になると、周囲を塀や建物で取り囲んだ閉鎖的な能舞台となり、さらに現在では菱形池内の島に移されている。

④ 内ノ大弐堂は下宮の東方にあった堂舎である。菱形池の大弐堂(池内大弐堂)が大宰大弐大江匡房の寄進であるのに対し、こちらは同じく藤原伊房の寄進と伝える。池内大弐堂は近世を通じて存続しているが、内ノ大弐堂がいつまで存在したのか明らかではない。「応永古図」・「寛永五年絵図」には一応描かれているが、それぞれの造営記録[3]には記載されていないので、早く消滅した可能性が強い。「島原藩絵図」以後描かれたものはない。

⑤ 楠観音　下宮の東方には社殿等の営繕のために常設された木屋がある。その近くの大楠が楠観音という名で親しまれ祀られていたらしい。樹幹の空洞部分に観音像が描かれた絵図もあるが、年代のわかるものでは「島原藩絵図」㈡のみである。「安政社頭図」では、すでに楠観音の名が忘れられたのであろうか、空洞をもつ同じ木がただ神木と記されている。

このほかに境内の御神木では、上宮の「八子」、西参道の「御神木」などがあるが、これらはほぼすべての絵図中にみられ

第7表　　近世宇佐宮境内絵図編年の目安

構成要素＼絵図			寛永五年絵図	島原藩絵図(一)	天明社頭図	安政社頭図	明治三七年刊行 社頭図
上宮	西大門	建築	※三間一戸二重門	向唐門	向唐門	向唐門	向唐門
		西中門との距離	(天文指図)約19.5m	(現在)約27m			
	衛士屋	西中門脇	○	×	×	×	×
		南大門脇		懸造り	平屋	懸造り	×
		西南隅				番所	番舎
	南大門下石段		×	○	○	○	○
下宮	御炊殿		天文指図の位置	同左	同左	×	
	御供所					東南側	○
	門		天文指図の位置	同左	同左	北へ移動	下宮参道に独立
	衛士屋		天文指図の位置	×	不明	門脇	同左
弥勒寺金堂			※7間×一	5間×一	※3間×3間	※5間×一	×
			重層入母屋造	同左	重層宝形造	重層宝形造	×
東宮	名称		※東宮2殿	東宮跡	×	東宮	春宮神社
	位置		天文指図の位置	同左	×	表参道南側	同左
祓所			×	御祓場仮殿	祓所	頓宮	頓宮
楠観音			×	楠観音	×	神木	
到津大宮司邸			×	×	×	○	

(※は絵図の虚構部分ないしは要検討部分)

る。

⑥　到津大宮司邸を記載した絵図は少ない。近世の年代のわかる絵図では、「安政社頭図」のみで、以後明治三七年刊行の絵図にみえる。

(二)　絵図編年の目安

以上、宇佐宮境内絵図編年を目的として、絵図の構成要素の検討を一応終えた。ここで整理してみると、近世絵図編年の目安となる重要な変化は次のようになる。

上　宮

イ　元文五年（一七四〇）、西大門として現存する向唐門を造立。あわせて、西中門～西大門の距離を拡大

ロ　衛士屋の位置ならびに構造

ハ　享保八年上宮炎上以前に、南大楼門下の石段築造

ニ　遅くとも安政年間には、旧経蔵の位置に宝庫が出現

下　宮

イ　御炊殿の位置の変更

ロ　門ならびに衛士屋の位置の変更

弥勒寺

イ　金堂の規模ならびに構造（宝形造り）変更の可能性（絵図に混乱がみられるので検討が必要）

その他

イ　東宮の名称ならびに位置の変更
ロ　祓所の名称変更
ハ　楠観音の記載
ニ　到津大宮司邸の記載

第七表にこれらを示す。

三　「到津家絵図」の成立

(一)　「到津家絵図」の史料的価値

近世に描かれた絵図のうち最も重要なものの一つが、到津家所蔵の「豊前国宇佐宮絵図」であることは前にも述べた。とりわけ弥勒寺伽藍に関して、「応永指図」を補完する情報を提供するほか、細川氏の修理に係る「仮講堂・仮金堂」の規模を知ることのできる唯一の史料である。残念なことに破損欠落部分が多いが、他の絵図にはない次のような特徴がある。

イ　宇佐宮境内における最も大きな特徴は、社殿や堂舎について、指図と建物とに描き分けをしていることである。弥勒寺部分では、西大門・呉橋・鐘楼・祇園社を除いて他はすべて指図風に描く。これに対し上宮では、東・南・北の各大門、国司屋・経蔵・垣屋を除いて他はすべて「応永古図」と同様、斜め側面からみた建物を描いている。また下宮では、三殿・講演堂・御炊殿・門のほかは西方建物群も含めすべて指図となっている。ただし、北辰社が描かれてないのは、恐らく描き忘れと思われる。

宇佐宮境内絵図のうちこれに類似した描き分けをした例は、享保八年（一七二三）の上宮炎上後の状況を記した「島原藩絵

図」(一)のみである。同絵図には、焼け残った護摩堂・御輿屋・若宮殿・亀山殿のみ建物が描かれ、他はすべて指図となっている。

ロ　宇佐宮および弥勒寺等の建物配置は、ほぼ「応永指図」に忠実であるが、次のような相違点もある。

・上宮では、衛士屋が南大門脇へ移動。

・弥勒寺では、輪蔵と対称位置に新たに経蔵が置かれ、金堂の西南脇にアカ井がある。また、四王堂と礼堂が入れ替り、東西宝塔が常行堂の東西に位置するよう南へ移動。「応永指図」では、常行堂と長僧坊が一つの建物、その北側に食堂が配置されているのに対し、「到津家絵図」では常行堂は単独の建物、「応永指図」の食堂に当たる建物内に長僧坊・食堂と記されている。

ハ　弥勒寺指図部分に各柱間寸法を記入。とくに講堂・金堂部分には次のように記載されており注目される。

弥勒寺大講堂	十八間	十二間半	各一丈三尺間	妻二丈五寸間
金　堂	十六間	十二間半	各一丈五尺間	妻二丈五寸間

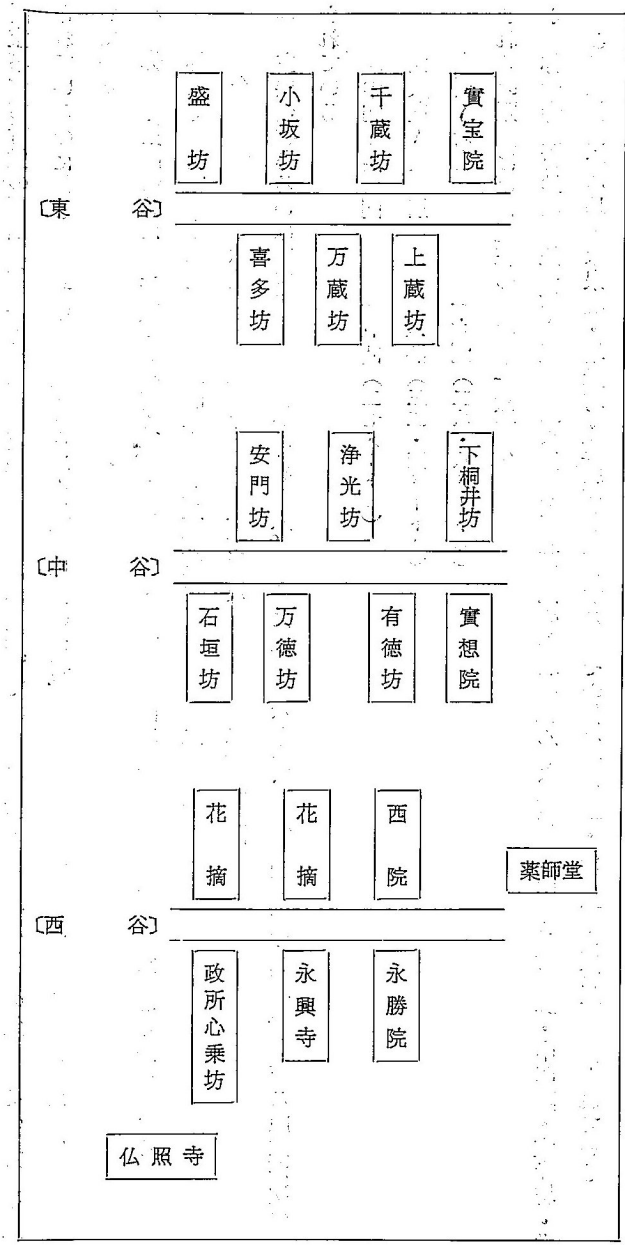
ニ　主要建物あるいは主な目標物間の距離を記入。とくに注目すべきは、上宮西中門から若宮殿に至る距離が次のように記されている。

西中門～西大門	一五間（二七メートル）
西大門～鳥　居	一八間（三二・四メートル）
鳥居～若宮殿	一六間（二八・八メートル）

これらの距離はほぼ現在のものと一致する。

ホ　弥勒寺北方地区の院や坊を記す。すなわち、北大門の参道を挟んで、西側に南から喜多院・中明院・宝光坊・堂仕と並び、東側に会所坊・永泉院・増光坊・宝蔵坊と相対する。その他に堂仕二・僧坊一・社官一が記されている。

ヘ　宮迫の院・坊については次のようである。



ト。周囲の町並みについても、寺・社人の家屋・小路名等克明に記入している。寺院では、大楽寺・円通寺・大善寺・護国寺・永福庵・戒光院などがみえ、小路名は中通小路・生代小路・蔀小路のほか大道・郷□行道などとある。

以上のように、到津家絵図は何らかの事情により指図を併用するという特殊な描法を用いている以外の部分では、当時の状況を記録する地図としてきわめて高い史料性を有する絵図と言うことができる。したがって、この絵図の成立年代を決定す

ることは非常に重要な意義をもつものであり、近世の弥勒寺伽藍の変遷を考察するうえにおいても欠かせない作業である。

(二) 「到津家絵図」の編年

「到津家絵図」の成立年代を推定する作業を次のように行う。

1 編年の目安に掲げた構成要素の抽出
2 前後関係の大まかな決定
3 前後の絵図を含む三絵図の比較検討
4 前後関係の決定
5 成立年代の推定

編年の目安となる「到津家絵図」の構成要素は次のようである。

〔上 宮〕 ① 西大門の建築　四 脚 門
② 西大門〜西中門の距離　一 五 間（二七メートル）
③ 衛士屋の位置　南大門脇
④ 同 建築　平屋建物
⑤ 南大門下の石段　坂、六〇間トアリ
〔下 宮〕 ⑥ 御 炊 殿　天文指図の位置
⑦ 門　天文指図の位置
⑧ 衛 士 屋　無
〔東 宮〕 ⑨ 名 称　東 宮

⑩	位　置	応永指図の位置
⑪	建　築	三殿指図
〔その他〕		
⑫	祓　所	無
⑬	祈皇寺	有
⑭	楠観音	有
⑮	大宮司邸	有

これらの要素のうち①および⑫によって、「到津家絵図」が「島原藩絵図」㈡に先行することは確実である。また、「寛永五年絵図」にない新しい要素②・③の存在は、同絵図より後出のものであることを窺わせる。そこで次に、「寛永五年絵図」・「到津家絵図」・「島原藩絵図」㈡の詳細な比較検討を行ってみよう。

「寛永五年絵図」を細川氏の造営記録に照して造立されていない建物を消去してゆくと、三絵図の間に次のような密接な関係があることがわかる。すなわち、弥勒寺の講堂・金堂・輪蔵を例外として細川氏の復興で造立されていない建物は、「到津家絵図」では指図で示され、さらに「島原藩絵図」㈡では描かれていない（×印）かあるいは「〇〇跡」と記されているのである。一般に指図は、建築しようする建物の配置や間取りなどを記した図面であることが多い。また、通常の絵図との併用例は「島原藩絵図」㈠においてみられ、焼失した建物は指図で、火災をまぬがれた建物は側面図というように描き分けを行っている。これに対し「到津家絵図」の指図で示されたものは、弥勒寺関係の二・三の堂舎を除いて明らかに「応永指図」段階の社殿・堂舎塔等、すなわち盛時の建物をほぼ網羅しているところに特徴がある。この点に関しては同絵図の制作目的とも係ることであるので後述することとし、さらに、三絵図の間にみられる関係を追求しよう。

① 西大門の移動にともなう西垣屋の形態と幣殿・経蔵との関係

西大門は細川氏の造営段階では造営または修理の事実はないので、「天文指図」に記された西中門との距離六丈五尺

第8表　「寛永5年絵図」・「到津家絵図」・「島原藩絵図」(2)の対照

		寛永絵図	到津家絵図	島原絵図(2)
上宮	西大門の建築	※三間一戸二重門	四脚門	向唐門
	同　位置	西中門との距離6丈5尺	同　15間	
	南・東・北大門	※三間一戸二重(楼)門	指図	×
	国司屋	※7間×2間	指図	×
	衛士屋の建築	平屋	平屋	懸造
	同　位置	西中門脇	南大門脇	南大門脇
	御輿屋		応永古図風平屋	瓦葺土蔵風
	幣殿	○	○	○
	経蔵	※ ○	指図	×
	南大門下石段	×	坂60間	石段
	西垣屋	直線(幣殿・経蔵を取り込まない)	直線(幣殿・経蔵を取り込む)	屈折(幣殿・経蔵を取り込む)
下宮	三殿	○(修理)	○	○
	講演堂	○	○	○
	廻廊	×	指図	×
	御炊殿	○(修理)	○	○
	門	○	○	○
	北辰殿	○(修理)	×(記載モレ?)	○
	西方建物群	※ ○	指図	×
弥勒寺	講堂	仮講堂(修理)	指図	5間×一
	金堂	仮金堂(修理)	指図	5間×一
	西大門	○(新築)	○	○
	鐘楼	○(新築)	○	○
	祇園社	○(新築)	○	○
	常行堂	○	指図	跡
	長僧坊	○	} 指図	×
	食堂	○		跡
	経蔵	輪蔵	※指図(東西2宇)	輪蔵
	阿伽井		○	○
その他	東宮	2殿	指図　3殿	跡
	祓所	×	×	御祓場仮殿
	内大弐堂	※ ○	指図	×
	女祢宜社	※ ○	指図	×
	頓宮	※ ○	指図	跡
	楠観音	×	○	○
	大宮司邸	×	○	×

(※は絵図の虚構部分)

（一九・五メートル）の位置に建っていたはずである。また、その後享保八年の上宮炎上時点も同様である。一方、「到津家絵図」では四脚門型式の西大門が描かれて、距離一五間（二七メートル）とある。この西中門～西大門間の距離の拡大にともなって、西大門から南へ延びる垣屋が新たに幣殿・経蔵（指図）を取り込むようになる。ただし、「到津家絵図」では屈折することなく直線の垣屋である。それが、復興後の姿を描いた「島原藩絵図」㈡では屈折して取り込むこととなる。

② 御輿屋の建築

御輿屋の建物は、細川氏も造立しており、「寛永五年絵図」によれば瓦葺平屋の建物に描かれている。同図は小さな建物は類型的で特徴がよくわからないが、享保八年の火災では類焼をまぬがれ、「島原藩絵図」㈠によれば瓦葺土蔵風の建物である。ところが、「到津家絵図」は「応永古図」風の平屋の建物が描かれている。

③ 衛士屋の位置

南大門脇に位置することで「到津家絵図」は明らかに「寛永五年絵図」より新しい要素を有する。

④ 南大門下の参道

「応永古図」・「寛永五年絵図」には、南大門下に通じる道はなく、替りに東大門下への道が後者にみられるだけである。一方、「到津家絵図」では南大門下に道をつけて、「坂六〇間」と記載されており、これは明らかに石段を描いている「島原藩絵図」㈠に先行する。

⑤ 弥勒寺の講堂・金堂について

細川氏の修理したものが、規模縮小したいわゆる「仮講堂・仮金堂」なるものであったことは造営記録によって明らかである。また、「島原藩絵図」㈡以後のいくつかの絵図で講堂・金堂がどちらも桁行五間の建物に描かれていることもすでに述べた。そこで次に「到津家絵図」中講堂・金堂部分に記載された寸法を問題としなければならない。そのうち、一八

上宮

御奥屋　護摩堂　北大門　住吉　北辰殿　春日　講演堂　西大門　西中門　御湯殿　南楼　御湯殿　東大門　幣殿　八子　経蔵　衛士屋　国司屋　花棚　南大門　坂六十間

下宮

御奥屋　御鵜羽屋　厨屋　土器屋　御炊殿　高蔵　求聞持所　御湯殿　講演堂　経蔵　幣殿　廻廊　衛士屋

第5図　「到津家絵図」の上宮・下宮

若宮神社　鳥居　御井　一ノ御殿　北中門　三ノ御殿　二ノ御殿　春日神社　北辰神社　住吉神社　申殿　西大門　西中門　勅使門　祈祷殿　授与所

0　50m

第6図　現在の宇佐神宮上宮（第1表のPより）

間・一六間という数字は、現状のそれぞれの基壇上礎石の桁行実測値である講堂一〇八尺、金堂九〇尺にきわめて近い。したがってこの二つの数字が、本来の講堂・金堂の桁行を表わすことはほぼ間違いないであろう。もしそうであれば、もう一つのそれぞれ一二間半という同規模の建物であることを示す数値を、「島原藩絵図」(二)等にみる桁行五間の講堂・金堂の規模に比定することも認められよう。

⑥ 弥勒寺の常行堂・長僧坊・食堂について

「寛永五年絵図」には、恐らく当時の現況を示すものとして描かれたとみられる小形の規模の常行堂・長僧坊・食堂の三棟がある。ところが、「到津家絵図」では本来の建物配置である「応永指図」と同一の配置の中に、「寛永五年絵図」と同じ三棟を示す配置が文字で書き込まれている。このことにより⑤の場合と同様、弥勒寺に関してはあくまで指図によって本来の建物配置と規模を示し、それに現状を併記しようと努めた「到津家絵図」描写の基本姿勢が窺える。

⑦ 弥勒寺の経蔵について

「安政社頭図」にもみえ、応永の造営以来存在している輪蔵までが「到津家絵図」では指図になっており、しかも南中門を挟んで対称位置にもう一つ経蔵が配置されている。これは、同図以外にはみられない独創とも言えるものである。

⑧ 祈皇寺について

祈皇寺については「寛永五年絵図」に寺名とともに三棟の建物が描かれている。祈皇寺がいつまで存続したのか史料に明らかではないが、「島原藩絵図」(一)(二)にはどちらも描かれていない。「天明四年社頭図」には、同じ場所付近に「祈皇寺古やしき」と記され、神宮の東南側に当たるところに「新皇寺新やしき」とある。

以上、「到津家絵図」と「寛永五年絵図」・「島原藩絵図」(二)の比較対照を行ってきた。結果は、最初に編年の目安となる主要な構成要素によって行った順序関係を変更する必要のないことを確認した。しかし、「到津家絵図」の成立年代に関して新たな疑問点も生じてきた。それは、同図が西中門～西大門間の距離の拡大という決定的に新しい要素を含みながらも、例え

ば南大門下に通じる石段を欠く、祈皇寺を記載する、衛士屋の建物を「応永古図」風に描くといった古相が随所にみられるということにある。「到津家絵図」の精密さからして、それらすべてを潤色とみることは到底できない。さらに、享保八年の上宮炎上後に描かれた「島原藩絵図」(二)との比較においても、衛士屋の建物や、南大門下への坂道などがより古相を示しており、西中門〜西大門間の距離を問題としなければ「到津家絵図」の成立を享保八年以前とすることは動かし難い。

(三) 「到津家絵図」の成立

ところで、以上のような矛盾や疑問点は「到津家絵図」をある時点の現況図と考えることから生じている。そこで見方を変えて、(主として上宮に対する)基本設計図ないしは計画図と考えてはどうだろう。つまり、享保八年以前に策定された将来の造替計画を示したものと考えるわけである。不幸にして享保八年(一七二三)上宮炎上という事態を経て、寛保二年(一七四二)に復興工事は完了した。その復興後の姿を描いた「島原藩絵図」(二)は、いわば竣工図である。したがって、両絵図が西中門〜西大門間の拡大という基本部分で一致しているのはむしろ当然とも言えることである。ただし、西大門に向唐門型式を採用し、衛士屋を懸造りに改めたことは、「到津家絵図」成立以後、復興実施段階における新たな企画であり、また南大門下に通じる石段は享保八年以前に造営されていたとしなければならない。

そこで次に、享保八年以前の段階でこのような造替計画が必要となった契機についてみておかねばならない。

近世における宇佐宮造営に関しては中山重記氏の論文に詳しい。[4] それによれば、細川氏の庇護のもとに復興を果して以後の宇佐宮は、それまでのような有力領主の本願による造替が望めない状況となった。正保三年(一六四六)には幕府が朱印領千石を寄進するが、これとて半分近くが神事料修理料に当てられるという状態で、とても造替費用がまかなえる余裕はなかった。そこで宇佐宮では再三にわたり御造営願を幕府に提出している。細川氏の復興から約七〇年を経過した天和二年(一六八二)には早くも造営願が出されているので、元禄期ごろになると「…宇佐宮當分所加修理之神社仏閣大小六十宇余御座候、細川三

第9表　　中世末〜近世の宇佐宮造営とその資金

	時期		主な造営	資金
A	応永25 〜 永享3	1418 1431	上宮(講演堂・廻廊・南中楼門・東西北中門・護摩堂・経蔵・東西北大門) 下宮(講演堂・廻廊・経所・竈殿) 弥勒寺(金堂・塔2・東西大門・常行堂・長僧坊・鐘) その他(楼門・呉橋)	(大内盛見)
	大永3	**1523**	宇佐宮・弥勒寺ほぼ全焼	
B	大永4 〜 天文12	1524 1543	(天文指図)	(大内義興 義隆)
	天正9	**1581**	大友氏による宇佐宮焼討	
C	慶長3 慶長10 〜 寛永10	1598 1605 1633	上宮第二殿 上宮(第一殿・第三殿・講演堂・廻廊・北辰殿・春日殿・住吉殿・御輿宿・護摩堂・南中楼門・東北中門) 下宮(第一殿・講演堂・門・御蔵) 弥勒寺(祇園・西大門・祝堂・呉橋) その他(若宮殿・大弐堂・文殊堂・舞台)	黒田孝高 細川忠興 細川忠利
	享保8	**1723**	上宮全焼	
D	享保15 〜 寛保2	1730 1742	上宮(3殿・講演堂・東中門・西大門・南中楼門・富所衛士屋) 下宮(北辰殿) その他(黒尾殿・喜多院塀・堂仕村塀・舞台楽屋塀)	大宮司宇佐公著復興努力 宇佐郡中庄屋より寄附(米160石) 幕府より寄進(白銀500枚) 元文2年(1737)神納富毎月興業
E	文化12 〜 文政9 天保3 14 安政2 6 〜 文久元	1815 1826 1832 1843 1855 1859 1861	下宮(3殿) 亀山殿 若宮殿 黒尾殿 上宮(3殿、現国宝)	朝廷・幕府奉納金(634両) 諸国勧化(10058両) 富方益金(7812両) 宇佐宮(米100石)

(註4により作成)

斎老御建立以後漸九十歳余成申候故、及大破申候…」という状況もあながち誇張的表現ではないほどに老朽化が進んでいたであろうと推測される。元禄三年（一六九〇）・同九年（一六九六）・宝永七年（一七一〇）と、たて続けに造営願が出されるのも切羽詰った宇佐宮の真情がよく表われている。宝永七年以後、文字通り心血を注いで造営のために東奔西走するのは大宮司到津公著である。その努力は、結果的に享保八年の上宮炎上後まで持ち越され、幕府より白銀五〇〇枚の寄進と「併相対にて奉加等致候儀、可為勝手次第候」の許可を得て、享保一五年（一七三〇）より造営に着手するのである。

以上のような宇佐宮造替をめぐる推移のなかで、建設計画を表わす絵図は不可欠のものである。とくに幕府に提出する造営願[5]や、諸大名・有力者に対する請願ないしは資金集めに際して、説明資料として常に携行されたはずである。したがって、「到津家絵図」をそのような説明用絵図の一つとみなせば、その詳細かつ精緻な描写の理由も自ら明らかとなる。同図がその内容分析から、享保八年（一七二三）の上宮炎上以前の成立であることはすでに述べたが、造営計画が最初に幕府あて造営願を提出した天和二年以来一貫して変らなかったとすれば、「到津家絵図」の成立年代の上限がそこまで遡る可能性も捨て去ることはできない。また、同絵図が到津家に残されていたことから、大宮司到津公著の江戸表における造替そして復興を目的とした資金調達活動に用いられた絵図である可能性は高い。

「到津家絵図」の成立年代が、享保八年以前ということになれば、絵図中央部に記された「□前国宇佐宮繪圖　當時怠□之神社佛□」との関係について触れておかねばならない。欠字を補えば「豊前国宇佐宮繪圖　當時怠轉之神社佛寺」となり、[6]怠転とは中絶する意味であるから、これはまさに上宮焼失後の祭祀が滞っている状態をさすものとみられる。[7]「到津家絵図」には、上宮・下宮をはじめ宇佐宮関係の社殿は一応描かれているので、「怠轉」の意味するところが一見明確でなく、指図で示された弥勒寺の方かと思ったりもする。しかし、同絵図が造替計画用から復興計画用として転用されたものと理解すれば、この疑問もすぐに解けるはずである。

四　おわりに

以上述べたところを要約すれば、「到津家絵図」の成立年代は一応天和二年（一六八二）～享保八年（一七二三）までの間と考えられるが、絵図の内容はその間でもかなり早い時期の制作であることを窺わせるものであった。また、同絵図制作の目的は、御造営願等に添付する造替計画を示す説明資料として用いるためであったが、享保八年上宮が炎上するや、今度は「退轉之神社佛寺」と表題を付して復興計画図として用いられたのである。このことが理解されるならば、同絵図において弥勒寺関係の堂舎が一部を除きすべて指図になっている理由もおのずと明らかになるであろう。すなわち、絵図制作当時存在したとみられる建物は、少くとも講堂・金堂・西大門・鐘楼・輪蔵の五宇は確実で、これに恐らく常行堂・長僧坊・食堂などが付属していたと考えられる。しかし、絵図中には僅に西大門と鐘楼のみが描かれているにすぎない。この理由の一つは確かに「到津家絵図」が上宮の造替を目的として描かれた計画図というその性格にあろう。ただ、宇佐宮の周辺も含めて現代の地図にも匹敵する正確さで描かれた絵図が、弥勒寺部分だけ（西大門は宇佐宮としても呉橋と一体となって表玄関とも言えるものであった）を明確に区別する扱いをしている理由はそれだけとは思えない。細川氏復興の時からすでに上宮においても、経蔵が造営されていないように、宇佐宮から仏教的色彩が次第に払拭されてゆく傾向にあったことは間違いない。したがって、単なる現況図ではない「到津家絵図」には、その辺の制作意図がより明確な形で表現されていると考える。もしそうであれば、「到津家絵図」において弥勒寺部分がすべて指図という特別扱いをされていることは、大げさな言葉ではあるがまさに弥勒寺の切り捨てであり、同時にそれは古代・中世的宇佐八幡の終焉として評価されよう。

前号に引きつづいて、宇佐宮境内絵図に関する問題点を扱ってみた。紙数や図の制約もあって説明不足のところも多いことと思う。大方の御叱正を賜りたい。最後に絵図の閲覧等に関して種々便宜をはかっていただいた宇佐神宮はじめご指導・ご協力を賜った資料館の諸氏に対し厚くお礼を申し上げる。

註

(1) 『宇佐宮弥勒寺』宇佐宮弥勒寺旧境内発調査概報Ⅳ　県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　一九八七

(2) 「宇佐宮寺御造営等書上」『到津文書補遺』六八　大分県史料(30)所収

(3) 「宇佐宮寺御造営并御神事法会再興之日記」『到津文書補遺』二九　大分県史料(30)所収、および註(2)

(4) 中山重記「幕藩体制下における宇佐宮造営について」『宇佐八幡宮の研究』(一)　一九八五

(5) 中山重記氏の論文によれば、幕府に提出した造営願は享保九年に一括して返還されている。

(6) 海老沢衷「弥勒寺地域の建物群と到津家所蔵絵図」『宇佐宮弥勒寺旧境内発掘調査概報』Ⅱ　一九八五

(7) 中山重記氏の論文によれば、この時宇佐宮は三日間の「廃朝」をしたという。

[redacted]・県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館調査課長)

大分県地方史料叢書(三)

豊前国村明細帳(一)

豊前国六六八ケ村の村名・村高・領主名を記した豊前国高帳の外、宇佐郡下麻生村・宇佐村・元重組・田口組・下毛郡今津組・宮園村・中摩村の村明細帳など八編を収録。近世史研究必備の書。

(頒価　会員二〇〇〇円、会員外二五〇〇円・送料共)

発行所　大分県地方史研究会

大分県地方史料叢書(一)

豊後国村明細帳(九)

肥後領大分郡高田手永「高田風土記」ほか海部・国東・速見郡の村明細帳五篇収録。近世史研究必備の書。

(頒価　会員二五〇〇円、会員外三〇〇〇円・送料共)

発行所　大分県地方史研究会